

母とぼくの「ありがとう」

古田 泰士
ふるた たいし

ぼくの母は三年前まで仕事をしていました。一日中働いていたので学童に迎えに来てくれるのはいつも夜八時を過ぎていました。時々九時になってしまうこともありました。この学童は駅の近くにあつて、公立や私立など色々な学校の子が預けられています。夜遅くまで友だちと遊ぶことができて楽しい思い出もありますが、そんな生活にぼくは不満を持っていました。それは放課後に学校の友だちと遊べないからです。「後で家に呼びに行くね」と、待ち合わせをしている友だちがうらやましかつたからです。だからぼくは、（お母さんが仕事を辞めればいいのに）と思っていました。そして時々、「お母さんが働いていない人はいいな」と言って、母を困らせていました。でもそんな時は決まつて、仕事がどれだけ社会に役立っているかをぼくにもわかるように説明してくれました。だから、母は仕事が大好きで、仕事に誇りをもっているんだ、ということがよくわかりました。

でも、そんな母がある日、「もう仕事辞めようかな」と言ったことがあります。ぼくが二年生の時です。夜、いつものようにバスを待っていたら、突然言ったのです。ぼくは母の顔を見ま

した。少し泣いているように見えてびつくりしました。「何で泣いているの」と聞いても、答えてくれませんでした。そのかわり、「お母さんが仕事をやめたらお友だちと遊べるね」と言い、涙を流していました。それを見て、二年生のほくがこう言ったのです。

「ぼくが野球の選手だったとするよ。(ぼくは小さいころから野球が大好きでした。)試合に出て、ホームランが打てなくて負けてしまったときに、(もう野球なんかやめなさい)ってあきらめたらどう思う? がんばってみてからあきらめなさい、って言うよね。」

ほくはその時のことをはつきりとは覚えていないので、何でそんなことを言ったのかはわかりません。でも、その後に「だからお母さんも最後までがんばってみて。ほくも学童ががんばるから。でもどうしてもつらかったらやめてもいいと思うよ。」と言ったそうです。今聞くとびつくりするようなセリフですが、母はそのことをとてもよく覚えていて、その後、号泣し、ほくに何度も何度も「ありがとう」と言ったそうです。

その一年半後に、母は仕事を辞めました。でも、「とても達成感を持って辞めることができました」と言っていました。最近、話してくれましたが、あの時は子供を育てることと仕事を続けることの両方をごんばるのがとても大変だったそうです。

ほくはずっと気になっていた質問をしました。「本当はもっと仕事していたかった?」すると母は「続けたい気持ちもあったけど、家族とゆつくり過ごさせるから幸せだよ」と言ってくれました。ほくこそ、「ありがとう」という気持ちいっぱいになりました。